令和４年度　　学校評価　　学校関係者評価書

学校名	三木市立緑が丘小学校

1　学校教育目標

自ら学び考え、心豊かに、たくましく生きる子の育成

2　本年度の重点目標

・指導方法の工夫改善により、基礎基本の定着を図りつつ、自ら課題を発見し、解決に向けて主体的に学習に取り組む態度を育成する。
・個性や良さを認めながら、夢や目標をともに話せる校風を築くとともに、様々な課題に柔軟かつ粘り強く対応できる能力や態度を育成する。
・各学校園、保護者、地域、関係機関と連携し、児童理解を深め、寛容で、思いやりがあり、多様な人々と共生する態度を養う。

4　自己評価の適切さについての学校関係者評価

・評価の観点とアンケートの質問項目とが対応しており、学校、保護者、児童の関連性も整理され、妥当な評価と思われる。
・学校評価書の評価項目（取組内容）と取組（達成）の状況、改善の方策の関連性が番号で整理され、対応策が明確であり、とてもわかりやすい。

3　自己評価結果　（達成状況）　（　A：達成している　　B：おおむね達成している　　C：あまり達成していない　　D：達成していない　）

5　評価の観点ごとの学校関係者評価

番号	評価の観点	評価項目（取組内容）	取組（達成）状況	評価	令和４年度改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
1	学習指導	①タブレット端末を活用しての個別最適な学びと協働的な学びについて研究を進める。 ②はじめと終わりの時間を意識しメリハリをつけて学習に取り組む等、学習規律を徹底する。 ③朝の学習タイム（週当たり国語２回、読書２回）、算数タイムを全学年一斉に、計画的に実施する。 ④昨年度活用した思考の視覚化とタブレット端末活用を組み合わせて授業で活用していく。 ⑤自分の考えを明確にさせるとともに、「ホップ・ステップ・ジャンプ」の話型を活用させることで、論理的に伝え合う力を育成する。 ⑥教科の枠にとらわれず、カリキュラムマネジメントを意識して複数教科での単元づくりに取り組んでいく。 ⑦外国語科、外国語活動でＡＬＴと連携し、教材を工夫することで、意欲的に取り組む授業づくりに努める。	①情報担当のリーダーシップの元、タブレット実践を積み重ねている。 ②休み時間のメリハリが曖昧になり、切り替えが難しい児童がいる。 ③④朝タイムや昼の算数タイムをプリント学習中心に計画的に、行うことができている。児童もタブレットの使用になれ、日常的に自然とタブレットを使用出来ている。それにより授業の中での活用もより進んでいる。一方で、実践の共有が学年内でとどまり、学年を超えて共有が少ない。 ⑤話型の活用が十分に共有されていないことがある。 ⑥生活科・総合的な学習の時間・特別活動の時間を中心として、単元を超えた授業づくりをしようとしている。 ⑦ＡＬＴと担任の連携で意欲的に取り組む児童が見られる。	B	①今後は、各学年の実践や、他校の実践を取り入れながら、ＩＣＴの有効活用を含めた個別最適な学びの実現に努める。 ②時間を守る意識を育み、教師も児童も時間のはじめ終わりを意識したり、休み時間の過ごし方について教職員で共通理解を年度初めに行ったりする。 ③家庭学習週間などで自己調整力を高める学習計画表を継続して活用する等、児童が主体的に学びに向かえる力を養う。 ④先進的な実践に取り組んでいる他校と連携し、教師間でタブレット活用の情報を共有しながら、授業改善を図っていく。 ⑤来年度は、話型の活用場面を具体的に提案し、職員の共通理解を図っていく。 ⑥中心とした教科を定め、めざす児童像を明確化していく。 ⑦今後もＡＬＴと連携して授業に取り組んでいく。	評価Bは妥当である。 ・自己調整力を高める取組に期待する。 ・タブレット端末を活用している時間が多いことが分かり、時代に沿った良い取組と思う。家でも取り組む児童もいると思うので、週末等持ち帰りをさせて欲しい。 ・今後もタブレット端末を活用しての個別最適な学びの実現に努めていただきたい。 ・タブレット端末の活用も期待するが、字を書くことにも力を入れてほしい。 ・参観では、学級を短時間しか参観できなかったが、教員の努力する姿勢は伺えた。 ・学習指導の充実に向けて努力していることが、取組（達成）状況、アンケート結果から伺える。
2	道徳・人権教育	①子ども達と遊んだり楽しく話をしたりと、教師と子どものコミュニケーションを進め、自尊感情を高めるような声掛けや関わりをしていく。 ②様々な体験活動、教育活動を通して生命を尊重し、思いやりに満ちた人間関係を構築する。 ③道徳担当を中心に、道徳的諸価値の理解を基に自己の生き方について考える「特別の教科道徳」の授業のあり方について研修を深める。 ④挨拶や清掃、時間遵守等、日常の学校生活の中で、規範意識や道徳的判断力を育成する。 ⑤「My town 緑が丘」をテーマに、各学年で系統立てた取り組みを引き続き行い、地域への愛着と理解を深める。 ⑥緑が丘中学校校区４校が連携し、同和教育・人権教育についての取組を進めていく。	①担任との関わりの中で、子どもたちの良いところをほめたりがんばっていることを伝えたりして自尊心を高める指導をしている。また、遊びを中心に担任外の教職員とのかかわりも持てていると教職員は感じているが、児童はもっと関わってほしいと願っている。 ②コロナ禍が和らいできたものの、未だに制限があり、児童同士の人間関係が希薄になってきている。 ③研修が十分にできておらず、道徳の授業を深める機会をより多く持つ必要があった。 ④人間関係の希薄化により、児童はあいさつや清掃活動をがんばっていると答えているのにかかわらず、保護者からみるともっと頑張ってほしいという願いがある。また、規範意識についても保護者、児童共に守れていると答える割合が減っているので自他共に大切にしているとはいえない状況である。 ⑤高学年中心として、５０周年事業と結び付けて活動を行うことができた。 ⑥緑が丘中校区の人権担当がそれぞれの取組を交流したり、研修会などの情報を公開するなど、年々連携は深まっている。	C	①担任だけではなく、他の教職員の関わりやＳＣ，通級指導など学校全体と外部機関との連携を強化し、子どもたちの様子に敏感に気づき、いろいろな角度から関わりがもてる機会を増やしていくようにする。また、子どもたちとの関りが増やせるように行事や事務の精選をしていく必要がある。 ②コロナ禍で制限はあるものの、教科をはじめ道徳、特別活動の内容を充実するように見直し、学級や学校全体で体験的に取り組めるように様々な活動を係と連携して提案する。 ③学校の教育目標や学校長の理念の元、授業の在り方について先進的な事例の研修を行う。 ④学校全体としてあいさつや清掃活動について推進できるように児童会などとも連携したり清掃方法をかえたりするなど、従来の取組から変化を持たせた取組を推進すると共に、道徳教育を中心とした様々な教科からアプローチしていく。 ⑤今後とも、今年度の実践を基に、実践を継続していく。 ⑥緑が丘中学校区の4校が人権・同和学習の観点で児童同士、教師間の連携を今後もはかり、緑が丘中学校にスムーズに入学できるようにする。	評価Cは妥当であるが、限りなくBに近いと考えられる。 ・担任だけでなく他の教師も協力し、学校全体でカバーし、関わりが増やせるようにして、無理のないようにしてはどうか。 ・他人（友達）のことを思った行動ができる児童を育む環境づくりを期待する。 ・どの教師も「ほめて伸ばす」実践していると感じる。 ・児童の取組や行事での児童の様子などが見ることができなかったのが残念である。毎朝の見守りの中、挨拶のできない児童も気になっている。 ・今年度はアンケート結果資料として、保護者の自由記述がないため、数字だけでは分からない保護者の声が拾い上げられず評価し難い。
3	生徒指導 安全・防災教育	①コロナウィルス感染予防の意味を正しく理解させ、自他ともに安心して過ごすために手洗い、換気等、望ましい生活習慣を身に付けさせる。 ②設定段階からめあての意識化を図り、主体的に考え動く習慣を身に付けさせる。 ③気持ちのよい挨拶を交わすことで豊かな人間関係の構築につながることを気づかせ、進んで場に応じた挨拶ができる習慣を身に付けさせる。 ④学年の発達段階に応じて、保護者・PTA、地域の方々の等、周囲の存在の有難さに気づき、感謝の気持ちをもつ機会を設ける。 ⑤「心の健康観察アンケート」や「心の健康相談週間」を充実させ、児童の内面理解に努める。 ⑥家庭・地域や関係機関と連携し、いじめや不登校の未然防止・早期発見・早期対応・早期解決を行う。 ⑦ネットモラル講習会、避難や防災、防犯訓練の実施等を通じて、命の大切さを実感させ、多様な場面に応じた危機管理・回避能力を育成する。	①手洗い・消毒、教室の換気等、感染症対策を前年度より継続し、給食では黙食が浸透した。ウィズコロナ時代の新しい生活習慣が定着したが、今も従来の学校行事が縮小されたり、授業の様々な場面で活動を制限せざるを得ないなどの状況も続いている。 ②全校集会などを通して児童が正しい行動基準をもって行動することの大切さを呼び掛け、各学年・学級において指導を継続している。指導の結果、判断基準を持ち、規律正しく思いやりのある行動をする児童が増えてきている一方で、今後も粘り強い指導が必要な児童もいる。 ③児童会が主体的に挨拶運動に取り組み、気持ちのよい朝の挨拶が習慣になった児童も増えている。しかし、まだ挨拶の大切さが全校的に浸透するまでには至っていない。 ④制限のある中でも、運動会やオープンスクール、音楽会等の行事を可能な形で実施したり、今年度からプール授業を再開したりした。また、各学年で学年行事も行い、周囲とのつながりを感じられる場が戻ってきている。 ⑤「心の健康観察アンケート」を学期に１度実施し、それを基に面談を行い、児童一人一人の心に寄り添うとともに、結果を統計的に見ることで学級の状態を把握した。 ⑥生徒指導上の問題やいじめ・不登校に対して、組織的に取り組んだ。必要に応じて、関係諸機関と連携してケース会議を行い、共通理解を図りながら対応した。登校しにくい児童に対しては、児童・保護者と相談のうえ、オンライン授業で教室とつなぎ、その結果、登校意欲が向上している児童が出てきた。 ⑦「みどりっ子タブレットの約束」を作成し、共通理解の上、情報教育に取り組んだ。また、休み時間中に地震が起きる想定の避難訓練を実施し、多様な場面に応じた危機管理・回避能力を育成した。「1.17をわすれない集会」では、震災経験を風化させず、命の尊さや共生の心を育んだ。	B	①コロナウイルス感染予防について配慮し、正しい知識と人権感覚を身につけることの指導を継続しながら、ウィズコロナ時代の中で、児童の活動意欲を維持・伸長するために指導の工夫を模索する。 ②考えさせる生徒指導を充実させ、児童が主体的に考えて望ましい行動がとれるよう、地道な指導・支援を積み重ねる。 ③周囲の人にできる最も基本的なことが挨拶であり、小さなことの積み重ねが大きな喜びにつながっていくということを、理解させながら実践していく。 ④コロナウイルス感染予防に配慮した行事の運営を図り、周囲の存在とのつながりに感謝する経験を重ねさせる。 ⑤「心の健康観察アンケート」や「心の健康観察週間」により、児童の心の変化を汲み取り個に応じた指導を行う。 ⑥未然防止、早期の発見・対応・解決を目指し、さらに関係機関と密に連携しながら、いじめ、不登校の防止を図る。また、教室に入りづらい児童に対し、リモート配信で教室の様子や授業内容を見せるなど、ＩＣＴ環境も整えていく。 ⑦タブレット端末を活用した学習の推進に並行して、タブレットを使用する上での共通理解事項を徹底し、ネットモラルやネットリテラシーについての指導を行い、情報機器を「学習」のために正しく使い、安全・安心なインターネットの利用の仕方を身に付けさせていく。また、多様な場面を想定した火災及び地震避難訓練を行い、災害から命を守るために必要な知識や思いやりの心を育てる。	評価Bは妥当である。 ・ネットモラル、ネットリテラシーについての学習は保護者も含めて積極的に実施していく方向が望ましい。 ・児童のタブレット端末の使い方は、ルールを守り、きちんと使わせてほしい。 ・「１・１７を忘れない集会」は今後も継続していってほしい。 ・安全や防災については各家庭においても保護者や児童達も積極的に意識していると思うが、保護者の声が見えないので、真意は分からない。 ・今後も継続して、児童が主体的に考えて望ましい行動がとれるよう、また、児童の心の変化を汲み取り、個に応じた指導をお願いしたい。

4	特別支援教育	①特別な支援・配慮を必要とする児童の教育的ニーズを把握し、適切な教育的支援を行う。 ②特別支援教育委員会において共通理解を深め、支援体制や支援方法の充実を図り、合理的配慮の提供に努める。 ③特別支援学校との交流及び共同学習や地域の福祉施設との交流学習では、コロナウィルス感染予防を徹底して実施する。 ④子ども園・中学校との連携を深め、計画的に教育相談や学校見学を行い、適切に就学指導を行う。	①児童の観察や保護者への聞き取りから教育的ニーズを把握し、個別の教育支援計画・指導計画を立てた。また、関係機関と連携し、実態に即した配慮の提供に努めた。個々の児童に合う教材を開発したり、タブレットパソコンや視覚支援を活用し、児童の理解を深められるよう努めた。 ②ケース会議を開いたり、学校校務システム等を活用したりし、全職員からの声を集め、特別な支援が必要な児童の実態把握や支援体制の共通理解を図り、より良い合理的配慮の提供に努めた。 ③特別支援学校や福祉施設との交流においては、学級ごとに交流に伺ったり、体験活動を小グループに分けて行ったりし、密にならないようにした。マスクや消毒を徹底し、感染症拡散予防に努めた。 ④子ども園を訪問し、対象園児を観察したり、電話で聞き取りを行ったりした。第５学年から、進学に向けての教育相談や、中学校と特別支援学校の学校見学、面談を行った。	B	①本人・保護者の思いを丁寧に汲み取り、個別のニーズに応じた個別の教育支援計画・指導計画を立てる。関係機関との面談を計画的に行う。児童の発達段階に応じたタブレットの活用方法を検討し、年間計画に位置付ける。 ②定期的に委員会を開催し、支援体制や方法の検討を行う。課題のある児童のケース会議を行い、担任だけでなく全職員からの意見を集約し、組織的に支援を行えるようにする。学校校務システム等を活用し、有効な支援方法などの引継ぎを積み重ねる。 ③より効果的に交流学習が行えるよう、関係機関との連携を深め、計画的に交流学習を実施する。今後も、直接交流が難しい場合は、オンライン等を活用した間接交流を工夫する。 ④入学や進級、進学にあたっての教育相談や学校見学を行い、スムーズな移行を目指し、学校園同士の連携を図る。個別の教育支援計画・指導計画や連携シートを活用した引継ぎを行う。	評価Bは妥当である。 ・教師は手厚く指導、支援されていると思う。 ・個別のニーズに応じた適切な教育支援が行われている。 ・コロナ禍での関係諸機関との交流や連携も工夫されている。今後も継続していただきたい。
5	キャリア教育	①自己有用感を体感できる温かな学級の中で、自尊感情を高める。 ②外国語活動や外国語学習、社会、道徳など、様々な教科や体験を通して、異文化に触れたり、世界の多様性を知ったりする。 ③キャリアノート活用の充実を図り、生涯を見据えて、学ぶ意義や価値を見出し生き方を探る基盤を形成する。	①総合的な学習の時間では、トライやるウィークの先輩から話を聞いたり、２分の１成人式で自分の将来の夢について向き合う機会を設けたりして、自身の将来について主体的に考える機会を設けた。また、学級活動や係活動等を通して、一人ひとりの良さを活かし活躍できる場を設け、自己有用感を持たせることができたが、さらに現在の生活と自分の将来の夢を結び付けて考えられるようにする必要がある。 ②外国語活動や外国語学習の時間において、ALTと連携を図りながら異文化に触れる機会を設け、コミュニケーションを交えながら世界の多様性を学ぶことができた。また、社会科で国際交流について学習し、その際にALTの出身国の国際交流について話を聞く活動に取り組んだ。 ③生活科や総合的な学習を通して学んだ内容を加え、それぞれの発達段階に合う取組を記録するなどした。また、キャリアパスポートを保護者と共有し、コメントを記述していただくことで、家庭との連携を図った。	B	①学級指導や授業の中で機会を逃さず、子どもの心の変容を促すような声かけを行い、児童自身の主体的な学び、生きる力につなげる。 ②異文化理解や世界の多様性について、ALTと連携を図りつつ、積極的に学べるような授業内容を今後も工夫していく。 ③現在活用している兵庫県版キャリアノートやパスポート等に本校独自の内容（各学年での取り組み及びその活動の振り返り等）を加え、更なる充実を図る。	評価Bは妥当である。 ・学級活動や係活動を通して自己有用感をもたせることができている。 ・引き続き保護者と連携を取りながら、キャリアノートの有効活用の充実を願いたい。
6	家庭・地域等との連携	①各学校園、保護者、地域、関係機関と連携し、児童理解を深める。 ②地域の人材や教材、施設の活用を通して、ふるさとを愛する態度を養う。 ③学校通信、ホームページ等を利用し、学校の様子、児童の学びについての積極的な情報発信を行う。 ④コロナウィルス感染の状況をみながら、授業参観等を実施し、保護者の参観機会を確保する。	①「おはなし会」「ステップアップルーム」などの活動で地域の方々にご協力いただき、子どもたちの活動の様子を見取り、児童理解を深めることができた。 ②花植え(１年生)、「環境体験学習」（３年生）、デイサービスひまわりとの交流(４年生)、精愛園との交流(５年生)やクラブ活動などの活動を通して、地域の方と共にふるさとの自然について学んだり、ふるさとへの愛着を深めたりすることができた。 ③学校通信やホームページ等での積極的な情報発信を図った。 ④新型コロナウイルス感染症対策を講じながら、授業参観、運動会や音楽会、マラソン大会など、子どもたちの日ごろの頑張りを参観頂く機会を設けた。	B	①②感染症対策をしながら、地域の教材や人材、施設を活用した教育活動を行い、その効果を高める。また、開かれた学校づくりに努め、学校、保護者、地域、関係機関の連携を密にしながら教育活動を行う。 ③引き続き、日ごろの学習や行事の様子について、ホームページや学校通信等で積極的な情報発信を行う。 ④新型コロナウイルス感染症対策をしながら、行事やオープンスクールの実施方法について工夫・改善する。	評価Bは妥当である。 ・友愛クラブも高齢化し、クラブ活動と１年生との花植えや昔遊びもいつまで継続できるか不安である。 ・「すぐーる」での情報発信は、遡って確認できることもあり、保護者にとっては有難かった。他の学年の取組等も見られると学校全体のことが把握できるのではないか。 ・学級懇談会が年度末だけであったので、状況や取組について十分に把握できない部分もあった。年度途中で何回か説明会等が必要だと思う。 ・お話会や花植え、垣根隊の見守りなど、地域との交流をとても大切にしている。 ・学校通信やホームページ等で積極的に情報発信を行っている。 ・新型コロナウイルス感染症対策を講じながら、行事や参観日の実施方法について工夫し、可能な限り開かれた学校づくりに努めている。
7	学校組織力の向上 ・ 教職員資質能力の向上	①学校評価や学校関係者評価制度を活用し、学校の運営改善に努める。 ②教職員が働きやすい環境の整備や業務改善に努め、子どもと向き合う時間を確保する。 ③校内研究を核に、児童の思考力や表現力を高める授業力の向上を図る。 ④ICT教育など新たな教育課題やニーズに対応した研修を充実させ、授業改善を促進する。	①学校評価における「取組の状況」や「改善の方策」について、より多くの教職員の意見を反映させるシステムを利用し、積極的な学校運営の改善に努めた。 ②業務改善についての研修をもち、アイデアを具体化（欠席連絡・検温でのすぐーるの活用等）させ、校務の効率化を図った。 ③全体の授業研究は実施できなかったが、昨年度の取組を継続し、思考力や表現力を高められるよう学年・学級で取り組んだ。 ④情報担当を中心に随時研修を行ったり、取り組みを紹介し合ったりして、授業改善、技能向上に努めた。	B	①年度当初に学校評価の結果を全員で再確認し、学校評価の「改善の方策」を意識し実施できるようにする。 ②今後も業務改善につながるアイデアを出し合う機会を計画的に設ける。 ③児童の実態をふまえ、思考力、表現力のベースとなる学びに向かう力を培える取り組みにも力を入れていく。 ④ICTはじめキャリア・外国語等、課題・ニーズのある領域の担当中心に研修や情報交換を積極的に行っていく。	評価Bは妥当である。 ・「すぐーる」での連絡は学校、家庭双方に良い取組だった。今後も利活用を進めて欲しい。 ・校内研究や研修会など、資質向上に努めていることが、教職員アンケート結果から伺える。 ・多忙の中でも、児童のために研修や講習に取り組んでいることに感謝したい。 ・今年度、もっと行事に参加できる機会があれば、良い評価もできたかと思うと残念だ。